

[D年] 聖霊降臨節第6主日(2020年7月5日)

【旧約聖書日課】ヨナ書 3章6節～4章11節

3⁶このことがニネベの王に伝えられると、王は王座から立ち上がって王衣を脱ぎ捨て、粗布をまとって灰の上に座し、⁷王と大臣たちの名によって布告を出し、ニネベに断食を命じた。

「人も家畜も、牛、羊に至るまで、何一つ食物を口にしてはならない。食べることも、水を飲むことも禁ずる。⁸人も家畜も粗布をまとい、ひたすら神に祈願せよ。おのおの悪の道を離れ、その手から不法を捨てよ。⁹そうすれば神が思い直されて激しい怒りを静め、我々は滅びを免れるかもしれない。」

¹⁰神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災いをくだすのをやめられた。

4¹ヨナにとって、このことは大いに不満であり、彼は怒った。²彼は、主に訴えた。「ああ、主よ、わたしがまだ国にいましたとき、言ったとおりではありませんか。だから、わたしは先にタルシシュに向かって逃げたのです。わたしには、こうなることが分かっていました。あなたは、恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方です。³主よどうか今、わたしの命を取ってください。生きているよりも死ぬ方がましです。」⁴主は言われた。「お前は怒るが、それは正しいことか。」⁵そこで、ヨナは都を出て東の方に座り込んだ。そして、そこに小屋を建て、日射しを避けてその中に座り、都に何が起こるかを見届けようとした。

⁶すると、主なる神は彼の苦痛を救うため、とうごまの木に命じて芽を出させられた。とうごまの木は伸びてヨナよりも丈が高くなり、頭の上に陰をつくったので、ヨナの不満は消え、このとうごまの木を大いに喜んだ。⁷ところが翌日の明け方、神は虫に命じて木に登らせ、とうごまの木を食い荒らさせられたので木は枯れてしまった。⁸日が昇ると、神は今度は焼けつくような東風に吹きつけるよう命じられた。太陽もヨナの頭上に照りつけたので、ヨナはぐったりとなり、死ぬことを願って言った。

「生きているよりも、死ぬ方がましです。」

⁹神はヨナに言われた。

「お前はとうごまの木のことで怒るが、それは正しいことか。」

彼は言った。

「もちろんです。怒りのあまり死にたいくらいです。」

¹⁰すると、主はこう言われた。

「お前は、自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。¹¹それならば、どうしてわたしが、この大なる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。」

【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙 2章11～22節

¹¹だから、心に留めておきなさい。あなたがたは以前には肉によれば異邦人であり、いわゆる手による割礼を身に受けている人々からは、割礼のない者と呼ばれていました。¹²また、そのころは、キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、

この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていました。¹³しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。

¹⁴実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、¹⁵規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、¹⁶十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。¹⁷キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。¹⁸それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。¹⁹従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、²⁰使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなえ石はキリスト・イエス御自身であり、²¹キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。²²キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 4章27～42節

²⁷ちょうどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何が御用ですか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者はいなかった。²⁸女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。²⁹「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」³⁰人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。

³¹その間に、弟子たちが「ラビ、食事をどうぞ」と勧めると、³²イエスは、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われた。³³弟子たちは、「だれかが食べ物を持って来たのだろうか」と互いに言った。³⁴イエスは言われた。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。³⁵あなたがたは、『刈り入れはまだ四か月もある』と言っているではないか。わたしは言っておく。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている。既に、³⁶刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている。こうして、種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶのである。³⁷そこで、『一人が種を蒔き、別の人が刈り入れる』ということわざのとおりになる。³⁸あなたがたが自分では労苦しなかったものを刈り入れるために、わたしはあなたがたを遣わした。他の人々が労苦し、あなたがたはその労苦の実りにあずかっている。」

³⁹さて、その町の多くのサマリア人は、「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。⁴⁰そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるように頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。⁴¹そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。⁴²彼らは女に言った。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ヨナ書 3章6節～4章11節

3⁶このことがニネベの王に伝えられると、王は王座から立ち上がり、王衣を脱ぎ、粗布を身にまとい、灰の上に座った。7王はニネベに王と大臣たちによる布告を出した。「人も家畜も、牛、羊に至るまで、何一つ口にしてはならない。食べることも、水を飲むこともしてはならない。8人も家畜も粗布を身にまとい、ひたすら神に向かって叫び求めなさい。おのおの悪の道とその手の暴虐から離れなさい。9そうすれば、神は思い直され、その燃える怒りを取めて、我々は滅びを免れるかもしれない。」

10神は、人々が悪の道を離れたことを御覧になり、彼らに下すと告げていた災いを思い直され、そうされなかった。

4¹このためヨナは非常に不愉快になり、怒って、²主に訴えた。「ああ、主よ、これは私がまだ国にいたときに言っていたことではありませんか。ですから、私は先にタルシシュに向けて逃亡したのです。あなたが恵みに満ち、憐れみ深い神であり、怒るに遅く、慈しみに富み、災いを下そうとしても思い直される方であることを私は知っていたのです。3主よ、どうか今、私の命を取り去ってください。生きているよりも死んだほうがましです。」4しかし、主は言われた。「あなたは怒っているが、それは正しいことか。」5すると、ヨナは都を出てその東にとどまり、そこに小屋を作り、日射しを避けてその中に座り、都に何が起るかを見届けようとした。

6神である主がとうごまを備えた。それはヨナを覆うまでに伸び、頭の上に陰をつくったので、ヨナの不満は消えた。ヨナは喜び、とうごまがすっかり気に入った。7ところが翌日の明け方、神は一匹の虫に命じてとうごまをかませたので、とうごまは枯れてしまった。8日が昇ると、神は東風を命じて熱風を吹きつけさせた。また、太陽がヨナの頭上に照りつけたので、彼はすっかり弱ってしまい、死を願って言った。「生きているより死んだほうがましです。」

9神はヨナに言われた。「あなたはとうごまのことで怒るが、それは正しいことか。」ヨナは言った。「もちろんです。怒りのあまり死にそうです。」10主は言われた。「あなたは自分で労することも育てることもせず、ただ一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまをさえ惜んでいる。11それならば、どうして私が、この大なる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、右も左もわきまえない十二万人以上の人間と、おびただしい数の家畜がいるのだから。」

エフェソの信徒への手紙 2章11～22節

11だから、心に留めておきなさい。あなたがたは以前は肉において異邦人であり、いわゆる手による割礼を身に受けている人々からは、割礼のない者と呼ばれていました。12その時、あなたがたはキリストなしに生き、イスラエルの国籍とは無縁で、約束の契約についてはよそ者で、世にあって希望を持たず、神もなく生きていました。13しかし、以前はそのように遠く離れていたあなたがたは、今、キリスト・イエスにあって、キリストの血によって近い者となりました。

14キリストは、わたしたちの平和であり、二つのものを一つにし、ご自分の肉によって敵意という隔ての壁を取り壊し、15数々の規則から成る戒めの律法を無効とされました。こうしてキリストは、ご自分において二つのものを一人の新しい人に造り変えて、平和をもたらしてくださいました。16十字架を通して二つのものを一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を減ぼしてくださいました。17キリストは来られ、遠く離れているあなたがたにも、また近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせてくださいました。18このキリストによって、私たち両方の者が一つの霊にあって、御父に近づくことができます。19ですから、あなたがたは、もはやよそ者でも寄留者でもなく、聖なる者たちと同じ民であり、神の家族の一員です。20あなたがたは使徒や預言者から成る土台の上に建てられています。その隅の親石がキリスト・イエスご自身であり、21キリストにあって、この建物全体は組み合わせられて拡張し、主の聖なる神殿となります。22キリストにあって、あなたがたも共に建てられ、霊における神の住まいとなるのです。

ヨハネによる福音書 4章27～42節

27その時、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何を求めますか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者はいなかった。28女は、水がめをそこに置いて町に行き、人々に言った。29「さあ、見に来てください。私がしたことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」30人々は町を出て、イエスのもとへ向かった。

31その間に、弟子たちが「先生、召し上がってください」と勧めると、32イエスは、「私には、あなたがたの知らない食べ物がある」と言われた。33弟子たちは、「誰かが食べ物を持って来たのだろうか」と互いに言った。34イエスは言われた。「私の食べ物とは、私をお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。35-36あなたがたは、『刈り入れまでまだ四か月ある』と言っているではないか。しかし、私は言っておく。目を上げて畑を見るがよい。すでに色づいて刈り入れを待っている。刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている。こうして、蒔く人も刈る人も共に喜びるのである。37『一人が蒔き、一人が刈り入れる』ということわざのとおりになる。38私は、あなたがたを遣わして、あなたがたが自分で労苦しなかったものを刈り取らせた。ほかの人々が労苦し、あなたがたはその労苦の実りにあずかっている。」

39さて、町の多くのサマリア人は、「あの方は、わたしのしたことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。40そこで、サマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところに滞在してくださるように願った。イエスは、二日間そこに滞在された。41そして、さらに多くの人が、イエスの言葉を聞いて信じた。42彼らは女に言った。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからである。」

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・7月5日「聖霊降臨節第6主日」の日課主題は「異邦人の救い」。使徒パウロが「異邦人の使徒」と呼ばれるように、ユダヤ・キリスト教の歴史の中で、信仰共同体の枠組みが「ユダヤ人」から大きく「異邦人」に開かれていったのは、初代教会で一定期間が経ってからのことである。しかしながら、「聖書の民」である「ユダヤ人」が、歴史的に常に民族主義的な観念を強固に持っていたわけではない。むしろ、紀元前6世紀に旧約正典化（「律法と預言者」の編纂）を推し進めて「ユダヤ教」共同体を形成した人々は、当初から、民族的・部族的枠組みを超えた「神の民」としての「ユダヤ人」を構想していた。たとえば、「イスラエル」の原歴史を物語る「出エジプト記」では、ヤコブとその息子たちの子孫について「ヘブライ人」と呼ばれ（1~2章）、モーセがエジプトから導き出した人々も「イスラエルの人々」のほかに「種々雑多な人々もこれに加わった」（12:38）と描かれている。「ユダヤ教」における民族主義的な指向性が顕著に現れるのは、後から正典化されていった「諸書」においてで、「歴代誌上・下」、「エズラ記・ネヘミヤ記」、「エステル記」、「ダニエル書」などでその傾向が強い。しかし、「諸書」の中には、ダビデ王の先祖にモアブ人の女がいたとする「ルツ記」、出自不詳の信仰者を描く「ヨブ記」なども含まれており、これらがまとめて正典として確定した紀元1世紀の「ユダヤ教」においては、すでに「民族宗教」という枠組みにとらわれない宗教共同体としての理解が一定程度共有されていたと考えられる。このときに明確に意識されたのが、「律法の枠組みに基づいて生きるユダヤ人」という観念である。このような背景の中で、「ユダヤ教」内の改革勢力として生まれた「キリスト教会」は、宗教共同体としての枠組みを異邦人へと拡大していくにあたって、彼ら異邦人に「律法の枠組みに基づいて生きる」ことを求めるのをやめて急速に成長した。「ユダヤ教会」が「同質性」を良しとし「同化」による共同体の拡大を指向したのに対して、「キリスト教会」は「多様性」に価値を見出し「多様性に基づく一致」という壮大な社会実験に乗り出したのである。

旧約日課(ヨナ 3~4章より)

・「ヨナ書」は、「十二小預言書」の5番目に置かれているが、もっぱら預言者の宣教物語という体裁でまとめられた、他に例を見ない「預言書」である。1:1で紹介される「アミタイの子ヨナ」は、本書で「預言者」と呼ばれることはないが、「列王記下」14章に、北王国オムリ王朝最盛期のヤロブアム王治世下で活動した「預言者、アミタイの子ヨナ」が伝えられており、同一人物として理解されてきた（近代の聖書学者は同一人物であることを否定する場合があるが、『聖書』内で明確に同一名で記されている以上、同一人物として解釈するのが自然であろう）。オムリ王朝ヤロブアム王の時

代は、「小預言者」の「アモス」や「ホセア」が活動した時代であり、後に北王国滅亡に伴って南王国に移っていった北王国出身の祭司・預言者集団が形成された時代と考えられる。この時代に東方で台頭してきたアッシリアは、ヤロブアム王亡き後の北王国やアラム（＝シリア）に侵攻し、覇権を握るようになっていく。

・日課箇所は、ニネベ（アッシリアの首都）の王と民の悔い改めが描かれ、それに対するヨブの不満と神の意図が物語られている。ニネベは、アッシリア帝国の首都として大規模開発がされたが、紀元前612年ごろ、バビロニア・メディア・スキタイ連合軍の侵攻を受けて陥落、破壊され、以後、大都市として再建されることはなかった。「ヨナ書」の最終編集・編纂は、おそらくこのニネベ陥落以後に行なわれている（「律法と預言者」の正典化＝最終編集・編纂は紀元前6世紀後半のバビロン捕囚からの解放以降と考えられる）。「ニネベを惜しむ神」を描くことで、戦乱により破壊され混乱した時代に生きる読者に対して、神の憐れみを信じて悔い改めることを促しているのであろう。

使徒書日課(エフェソ2章より)

・「エフェソの信徒への手紙」は、パウロ書簡の一つで、「コロサイの信徒への手紙」との共通性が特徴。エフェソやコロサイでは、黙示録にも挙げられる「小アジアの七つの教会」と呼ばれる教会共同体が形成されていたと考えられ、使徒らの書簡が回覧されていた。

・日課箇所ではパウロは、「イスラエルの民」への帰属が「割礼」の有無による区別によってなされていた現実を踏まえて、その区別がキリストによって完全に取られたと告げている。その中で、キリストが「規則と戒律ずくめの律法を廃棄」されたとしているが、肝心の「隔ての壁」については「敵意」の問題として触れている。パウロの「律法論」は、「ローマの信徒への手紙」でまとめた論考があるが、必ずしも整理しきれていない。その背景には、「律法」という語が示す事柄に関する混乱がある。「律法」は、ヘブライ語「トーラー」の訳語で、新約ギリシア語では「法則」の語義を持つ「ノモス」が充てられている。旧約で「トーラー」の語が用いられるとき、その意味は「教え」という広い概念で、それゆえ「神の言葉」とほとんど同義で理解される。同時に、旧約では大枠の「トーラー」の中で、具体的な「掟(コーケ)」「法(ミシュパト)」「戒め(ミツワー)」などが示されている。伝統的に「ユダヤ人としての生活規範」は「613のミツワー」として教えられてきたが、パウロは、この「ミツワー」としての狭義の「律法」と、「神の教え・言葉」としての広義の「律法」を、ギリシア語「ノモス」のもとで区別せずに扱い、ときに矛盾するような論理展開を強いられている。日課箇所は、「ミツワー」によって枠組みを与えられる「ユダヤ人」と、その外にいる者との間に「敵意」が生じるところに、「隔ての壁」を見ているのである。

福音書日課(ヨハネ 4 章より)

・日課箇所は、「サマリアの女」の逸話の後半。井戸縁での女との対話をきっかけにして、主イエスが二日間サマリアに滞在し宣教されたことを伝える。主イエスのサマリア宣教は、ルカ福音書では、失敗に終わった逸話として伝えられており(ルカ 9:51 以下)、実際のところは不明。おそらく、ヨハネ福音書では、主イエスの宣教が「ユダヤ人」の枠組みを超えて広がっていくことを段階的に描くために、まず「サマリア宣教」の逸話をここに置いたのだろう。「サマリア人」と「ユダヤ人」は、先祖の宗教を同じくしながら、異なる「宗教共同体」を形成することで互いに敵対していた。「ルカ・使徒言行録」でも、教会の宣教拡大は「エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで」と語られており、「サマリア宣教」は、初期教会にとって世界宣教への第一歩として避けて通ることができないものであった。

・日課箇所は、井戸縁での主イエスと女の対話を受けた形で、弟子と主イエスの対話、また、主イエスを受け入れたサマリアの人々の信仰が、入り組みながら描かれる。このような描き方によって、弟子たちの教会の「サマリア宣教」が、主イエスの御業を受け継ぐ「収穫の働き」であることを示そうとしているのであろう。

・この場面での「女」と「サマリア人」の関係は、主の復活を目撃し報告した「マグダラのマリア」と「弟子たち」との関係と類比的に描かれている。「一人の女」の果たした役割を強調しながら、最終的にその役割も背後に隠れ、各自が主イエスと直接の関係を形成するのである。

来週の誕生日 (7月1日～11日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-17 番「聖なる主の美しさと」(= I 7 番「主のみいつとみさかえとを」)は、19 世紀英国教会司祭モンセルが代上 16:29 に基づき公現日のための讃美歌として作詞。曲は、同時代の米国で知られた讃美歌作曲家シャーウインの作品。

・21-425 番「こすずめも、くじらも」は、1983 年、米国ミズーリ州のコンコーディア・ルーテル教会の設立 110 周年記念のために新しく作られ(作詞作曲は 82 番「今こそここに」と同じコンビ)、後に諸教派の讃美歌集に採用された。

・21-416 番「神の民は」(= II-145「かみのたみは」)は、オランダの讃美歌作家オースターハウスの作詞。彼は、元カトリック司祭だったが離脱して活動をしている。この讃美歌は、エキュメニカル聖歌集で発表された後、WCC 編『今日の新しい讃美歌』(1966 年)に再録、英語版から邦訳が作られた。

21-17「聖なる主の美しさと」**Worship the Lord in the beauty of holiness**

1. Worship the Lord in the beauty of holiness;
Bow down before Him, His glory proclaim;
Gold of obedience and incense of lowliness
Bring, and adore Him: the Lord is His name!
2. Low at His feet lay thy burden of carefulness;
High on His heart He will bear it for thee,
Comfort thy sorrows, and answer thy prayerfulness,
Guiding thy steps as may best for thee be.
3. Fear not to enter His courts in the slenderness
Of the poor wealth thou canst reckon as thine;
Truth in its beauty, and love in its tenderness
These are the offerings to lay on His shrine.
4. These, though we bring them in trembling and fearfulness,
He will accept for the Name that is dear,
Mornings of joy give for evenings of fearfulness,
Trust for our trembling, and hope for our fear.
5. Worship the Lord in the beauty of holiness;
Bow down before Him, His glory proclaim;
Gold of obedience, and incense of lowliness
Bring, and adore Him: the Lord is His name.

21-425「こすずめも、くじらも」**God of the Sparrow**

1. God of the sparrow / God of the whale / God of the swirling stars / How does the creature say Awe / How does the creature say Praise
2. God of the earthquake / God of the storm / God of the trumpet blast / How does the creature cry Woe / How does the creature cry Save
3. God of the rainbow / God of the cross / God of the empty grave / How does the creature say Grace / How does the creature say Thanks
4. God of the hungry / God of the sick / God of the prodigal / How does the creature say Care / How does the creature say Life
5. God of the neighbour / God of the foe / God of the pruning hook / How does the creature say Love / How does the creature say Peace
6. God of the ages / God near at hand / God of the loving heart / How do your children say Joy / How do your children say Home

21-416「神の民は」**Aan wat op aarde leeft**

1. Aan wat op aarde leeft, geeft Gij hetzelfde brood.
En wie er U om smeekt, wordt met uw Geest gedoopt.
Geef ons dezelfde taal om uw Woord te verstaan.
Bewaar ons in uw hand, bewaar ons in uw Naam.
2. Wie in uw Vlees gelooft, geeft Gij uw eeuwig Woord.
Omdat Gij zijt gedood, bestaan wij altijd voort.
Leid al wie leven wil uw woning tegemoet
omwille van uw dood, omwille van uw bloed.
3. O Geest, die levend maakt en voegt het al aaneen.
Wij zijn verstrooid geraakt, maar Gij houdt ons bijeen.
Weersta toch aan de macht die onze harten scheidt,
o alvermogend woord, o licht van eeuwigheid.